

講座

フロイトは何を遺したか

—フロイトの復権（6）—

布施 裕二

【キーワード】 神経症，エディプス・コンプレックス，去勢威嚇，抑圧

第七章 精神分析学的研究の一つの見本

まずは、この章の題名を理解する必要がある。「精神分析学的研究の一つの見本」とは、どういうことを意味しているのか。これを理解するため、『精神分析学概説』全体の構成を、あらためて振り返ってみる。

序言

第一部 精神の本質

第一章 精神装置

第二章 本能学

第三章 性的機能の発達

第四章 精神の性質

第五章 夢解釈についての説明

第二部 実地上の課題

第六章 精神分析技法

第七章 精神分析学的研究の一つの見本

第三部 理論的収獲

第八章 精神装置と外界

第九章 内界

そうすると、これは「第二部 実地上の課題」の中に位置するものであり、次の「第三部 理論的収獲」につながるものと分かる。第一部では「精神とは」を、精神装置という仮説に基づき、本能を精神の基盤とし、性的本能がどのように発達していき、それ

によって精神というものが、どのように創られていくのか、そこで夢はどのような働きをするのかを、フロイトなりに説いた。第二部第六章では、第一部の内容を踏まえて、精神分析療法が実際にどのように行われるかを説いた。そして第三部では理論的収獲として、精神装置が外界とどのように関わり、そこで内界がどのように創られるか、という精神の一般論的な展開になっていく。これらの展開の中で、第七章は精神分析学的研究で得られた中身が、「一つの見本」という形で語られることになる。すなわち、神経症とはいかなる病で、それを引き起こす要因はどのようなものかを説いていくことになる。

章の初めでは、次のように述べられている。

「われわれは精神装置について、その各部分、器官、それを構成している各領域、そこに作用している力、その各領域に与えられている機能などについて一般的な知識を獲得した。神経症や精神病は、この精神装置の機能障害が表現された状態である。」（188～189頁）

第一章で説かれた「精神装置」のあり方を踏まえ、神経症や精神病を「精神装置の機能障害が表現された状態」と捉えている。精神装置の「機能障害」そのものではなく、「機能障害が表現された状態」という記述に注目したい。仮説として挙げた精神装置が、うまく働かなくなった、その結果として表れる現象が、

神経症や精神病だと言うのである。機械的なあり方に喩えての「精神装置」であるが、その機械が故障し、その結果見られる現象を精神の病としている。

「神経症者も他の人々と同様な先天的素質を持ち、同じ体験をする。彼らだけが一般の人々とは異なった問題を解決しなければならないわけではない。それにもかかわらず、なぜ彼らは一般の人々よりもはるかに悪い、苦しい生活をしなければならないのであろうか、なぜ一般の人々よりも多くの不快感、不安、苦悩に悩まされるのであろうか。」（189頁）

何故に、精神装置が障害される状態になるのか。神経症者と一般の人々とは、何が異なるのか。何故、より苦しい生活を送らねばならないのか、という問題提起である。ここで前提とされているのは、「他の人々と同様な先天的素質を持ち、同じ体験をする」ということである。これは、あくまで外見上（現象上）のことであるのは、これまでのフロイトの展開を見れば分かることである。フロイトはエディプス・コンプレックスを重視し、それをどう乗り越えるかが、神経症の形成に大きな影響を与えると見ているからである。それゆえ、ここはあくまで、世間一般の見方を踏まえての問題提起である。

「人間の精神生活のあらゆる形態をひき起こしている原因は、持って生れた素質と偶然の経験との相互作用の中に求められる。ところで、ある特定の本能が強すぎるとか弱すぎるとかいうことがあり、特定の能力が萎縮していたり、生活の中で、十分に発達しなかったりすることがあるかもしれないし——他方では、外的な影響や体験がある人々には普通と異なった強度の要求を課することにもなる。また、ある人の体質ならば支配できることでも、他の人にとってはあまりにも背負いがたい重い課題となることもあるかもしれない。これらの量的差異が種々異なった結果を生む条件となるであろう。

しかし、この説明では十分ではないと、ただちに

われわれは言い返すであろう。それはあまりにも一般論的である。」（189頁）

ここでも世間一般の見方が挙げられている。精神の特性を創る要因としての素質と経験とである。持って生まれた本能的なものと、その人の偶然の経験とが、その人の特性を形作るという見方である。すなわち、本能的なものが強い人とそうでない人とは、同じ様な経験をしても、そこに耐えられる力に違いがあるし、それまでの体験によって創られた能力の違いでも、経験の仕方が異なるという。素質と経験の量的な差異を重視する見方である。しかしフロイトは、その説明では不十分だとする。それでは「一般論的」であり、もっと詳しい説明が必要だと、次の様に述べる。

「生活史上の一定時期の持つ役割について、われわれはかなり確固とした見解を述べることができる。神経症の症状が症状として表面化するのはずっと後になってではあるにしても、神経症そのものが形成されるのはもっぱら早期幼児期（六歳まで）においてであるように思われる。幼児神経症は短期間だけ顕在化する場合もあり、また、潜伏したまま看過されることさえある。その後の神経症的疾患は、すべてこの幼児期の序曲を出発点としてそこから始まっているのである。しかしおそらく、外傷性神経症といわれるもの（列車の衝突、土砂埋没のような極度の恐怖、激しい身体的衝撃によるもの）は例外であろう。」（190頁）

ここでフロイトは、自らの独創となる見方を述べる。神経症そのものが形成されるのは、早期幼児期（六歳まで）だとする見方である。それを基にして、神経症の症状が将来表れていくというのである。これは単なる素質や経験の問題から、発達史的な問題への移行と言える。成人してから現れる神経症は、実は早期幼児期に、その基盤があるという発達史的見方である。これは従来の原因論からの発展と言える

もので、フロイトの独創として、歴史的に評価されねばならない。もちろん、「六歳まで」という、発達の時期を区切った見方であり、果たしてそこで「神経症そのもの」が形成されるのか、という疑問も生じるものではあるが、それまでの見方からは発展していると言える。ただ、フロイトのように神経症を捉えてしまうと、強烈な体験によって生じるとされる「外傷神経症」は、例外扱いされることになる。

「神経症は、われわれが知っているとおりの、自我の病態化であり、自我が弱く、未熟で、抵抗力がない間は必然的に自我が成長した後になればきわめて易々と解決できるような課題の克服にさえ失敗する（この場合内部からの本能要求は外界からの刺激と同じように『外傷』として作用する。一定の素質がこれらの本能要求を強化する場合には、殊にこのような事態が成立し易い）。」（190頁）

前章の「精神分析技法」で見たように、神経症に治療が必要なのは、自我の働きがまともに行われなくなるからである。すなわち本能からの要求のコントロールが、うまく行えないことによって、日常生活に障害を来すことになる。それを「自我の病態化」と呼ぶのである。それは成人してから表れるものであるが、その状態になりやすいのは自我が幼い時期であり、その頃は本能からの要求を「外傷」とまで感じて、そのコントロールが難しくなり、そこに素質の問題も関わってくるという。これが、幼児期に神経症の問題ありとするフロイトの見方である。本能のコントロールを発達の課題とするフロイトにとって、自我の幼い幼児期こそが危険な時期なのである。では、その幼い自我は、本能をどのようにコントロールしていき、成熟した自我として創られていくのか。

「この小さな原始人（幼児）は短い年月の間に文明化した人間にならねばならない。すなわち、人類文明の発展の偉大な道程を、恐ろしいほどに短縮して通過しなければならない。このような発達は遺伝

された（人類特有の）素質によって可能である。しかしそこには、超自我の先駆者として、自我の活動を禁止や処罰によって制限し、抑圧過程を容易にしたり強制的に押しついたりする教育、両親の影響という、出生後に加えられる圧力を無視することはできない。」（191頁）

幼児を原始人に喩えている。本能のコントロールがうまく出来ない存在としてである。それが短い年月で、文明化した人間（大人）になっていかねばならない。それは人類特有の素質で出来るものであるが、その過程で、自我の活動を禁止したり処罰したりする両親の働きかけが大きく関わってくるという。本能のコントロールの仕方について、あれこれと働きかけてくるのであり、それが本人の超自我形成、規範形成の基盤となるという。幼児の本能コントロールは、親から働きかけられる影響が大とする見方である。

これは幼い時期における、両親の働きかけの大事さ、特に規範的認識形成の大事さを述べている点では妥当と言えるが、本能コントロールという特殊的認識に限っている点で、限界のある見方と言わざるを得ない。そこでは他人との関わり合いの基盤が、親との関係において発達の的に創られるということを、むしろしっかり見ておく必要がある。

「他の問題に移って、特殊な本能的因子に関して、われわれは理論と経験との間に一つの興味深い不一致を発見する。理論的には、どのような本能要求も、同じような抑圧、それに伴う結果を惹起する契機となり得るという仮定に反対することはできない。しかし、われわれの判断し得る限りでは、この病因的役割を演ずる本能興奮が、もっぱら性生活の部分本能に由来するという事実が、われわれの観察によって常に示されているように思われる。」（191頁）

本能の中でも、性的な本能のコントロールの仕方が、神経症の病因的な役割を果たす。食や睡眠という本

能的なものが他にあるとしても、それはあまり問題にならずに、性本能が神経症に関わってくるという。それはフロイトの経験によって得られた見方であって、それ以上でも以下でもない。すなわち、神経症の患者の治療を行っていく中で、その病因として、性的な出来事が大きいことが分かったからである。けれども、そのような患者の生活において、どのように食が摂られ、どのような睡眠であったのかを検討することも、本来は大事なことである。それらが脳細胞の働き＝認識に大きく関わってくるからである。

「神経症の症状は、一般にある種の性的傾向の代理満足であるか、あるいはそれを阻止するための方法であり、無意識について妥当する一般法則に従ってその両者の間に成立する妥協形成である、ということができる。現在のところ、われわれの理論上の欠陥はこれを埋められない。決定を困難にしているのは、性生活の衝動の大部分のものが純粋にエロスの性格ではなく、破壊本能も加わったエロスの本能の合成物に由来しているという事情である。しかし、生理学的にいった性欲としてあらわれる本能が、神経症を引き起こす原因として、著しい、思いもよらない大きな役割を演じていることには疑う余地がない。ただそれだけが唯一の原因であるかどうかは決定しないでおくことにする。」（191頁）

ここでは神経症の症状について、その発現のメカニズムを説いている。精神装置の障害の表れである神経症の症状、それは自我が性的本能をうまくコントロール出来なくなった結果であるが、そこには性的傾向の代理満足や、性的満足を阻止するようなものが現れる。性的満足か阻止かを決めるのは、無意識における力関係であり、いずれにせよ直接的な性的満足を得られないことを、その原因にしている。これがフロイトの基本的な見方である。

ただ、上記の文には、フロイトの自信の無さも表れている。それは「破壊本能」の存在である。以前に取り上げたように、神経症の治療過程において、

性的満足には関心がなく、自分を破壊することに一生懸命に見え、治療がうまく進まない患者群と出会うことにより、性的本能だけでなく破壊本能というものを提起せざるを得なかった。そこに気が付いてしまったフロイトは、エロスの性格の本能だけでは、もはや論を展開できなくなっている。それでも、性欲が大事な要素であることを捨てることは出来ない。

「自我組織の弱点は性的機能に対する自我の態度の中にあるといっても、おそらく誤りではない。すなわち自我は、その性的機能を通して、自己保存と種族保存の間の生物学的対立の心理的な表現を見出したのである。」（192頁）

種族保存というのは、性的な本能に基づき、性的な機能を駆使して子孫を残すことを意味する。それは自我の働きであるが、自我には自己自身をしっかり保つという働きもある。その二つの機能の間で、自我が揺れ動くことになるゆえ、性的機能において弱点を持つというフロイトの主張である。ここには性的本能を神経症に結びつけようとする、彼なりの理由付けがある。それは人間を類として見るものであり、人間発達の歴史的観点からのものである。このように捉えないと、性的本能論が正当化出来なくなっている。

「われわれの注意は、しばしば現われはするがすべての子供に認められるということとはできないようなある種の出来事が及ぼす影響に、まず惹きつけられる。すなわち、その出来事とは、大人による子供の性的凌辱、多少年長の子供（兄や姉）による性的誘惑、さらに全く予期されなかったことであるが、常識ではまだそのような経験に対する関心も理解もなく、それを後になって思い出す能力もそなえていないはずだと思われる時期に、大人たち（両親）の間の性行為を目撃したり、盗み聞いたりしたことから受けた打撃などである。」（192頁）

ここには、性的な機能に結びつくと思われる、様々な行為が挙げられている。大人や年長の子どもが、幼い子どもに対して行う性的行為、幼い子どもが大人の性的行為を目にする衝撃などである。それによって、幼い子どもの性的な機能に影響を受けるという。いずれも、性的本能論を裏付けるような「事実」と言える。

ここで注意しなければならないのは、このように述べるフロイトの情報は、自分が治療した神経症の患者から得られたものが大半であり、大人になっている彼らが、幼児期を振り返って述べたのを基にしていることである。それらが全く事実でないとは言わないが、治療中の患者自身の主観的な見方が大であり、それを踏まえて見るべきである。すなわち、フロイトによる性的な問題に関する治療中、連想させられ思い起こしたものとしてである。たとえば、本人が「打撃を受けた」ということにしても、子どもの時にそう感じたのか、今思うと、そのように感じた気がするのか、その区別をしっかりと付ける必要がある。

「これらの印象は、その直後か、あるいは暫くたってから記憶として再び想起され遂には抑圧を蒙るに至り、この抑圧の結果、後になって自我が性的機能を支配することを不可能にし、永久にその機能から離反する契機となるかもしれない神経症的強迫を惹起する条件を生み出すことになる。」（192頁）

性的な出来事の衝撃は、まともに解消することがないまま、頭の中に思い出された後に、それを意識しないように無理矢理抑えつけてしまい、そのことが後の性的なコントロールを難しくしてしまって、神経症を生み出す条件になるというのである。幼児期に性的な本能のコントロールがうまく出来ないと、大人になっての性的な本能も、うまくコントロール出来ずに、神経症になるという見方である。

これも治療中の患者から得られた情報を基にしたものであるが、そのような衝撃を幼い頃に受けて、

その認識を誰にも整えてもらえていない、その幼児期の人間関係の持ち方にも注意したい。どのような人と、どのように関わったのかという、社会関係の視点が、そこでは大事なのである。

「このような運命をたどる神経症患者の症例がどんなに多くのことを教えるといっても、さらにそれ以上の関心が向けられる状況がある。すなわち、すべての子供が経験すべき運命を持ち、幼児期の庇護期間が延長されたことと両親との共同生活という因子から必然的に人類に発生した一定の状況の影響に対して、われわれのさらに切実な関心が向けられるのである。私はエディプス・コンプレックスのことをいっているのである。」（192～193頁）

先に挙げた性的外傷体験は、誰もが出会うものとは限らないが、誰もが出会う性的な体験として、エディプス・コンプレックスが挙げられている。これは、子どもが両親との共同生活を長く行うようになって生じた、人類にとって必然的なものだという。すなわち、父親と母親との共同生活の中で、必然的に生じる性的体験の問題が、そこに見られるというのである。偶然の性的体験から、必然の性的体験へと、フロイトの論は展開していく。

そもそもフロイトの初期の研究では、神経症者における「性的外傷体験」を問題にして、それについての抑圧（自分でその体験を思い出さないように抑えつける）を取り除くこと（その体験を治療者に進んで話せるようになる）を治療の重点にしたのだが、患者の訴える外傷体験に疑問が生じるようになり（患者の頭で勝手に創り出すこともある）、更なる治療の発展を求めた。それが「エディプス・コンプレックス」の発見であった。

フロイト自身の幼児期の体験も重ねて、それが誰にも生じるものであることを知ったのである（「エディプス王」という古代神話を踏まえて）。そしてそれを治療上の大きな問題にするようになった。すなわち、幼児期に体験する異性の親に対する性的な

愛と、それを妨げる同性の親との対立という問題の解決の仕方が、後の大人になった際の性的問題解決に大きく影響し、それをうまく解決できないことが、神経症の発症につながっていくとしたのである。それゆえ、治療者との関係を通して、幼児期の性的問題を解決することが、神経症の治癒につながっていくと考えた。

「子供の最初の性的対象は養育する母の乳房である。愛は栄養欲求の満足に倚りながら発現してくる。」
(193頁)

ここでの「性的」というのは、愛情を持つという意味である。母親から母乳という栄養を得ることで、母の乳房が性的な対象になるという。栄養的に満たされて、性的な対象になるということで、現代のように母乳でなく人工乳ならどうなるのか、という突っ込みも入りやすいが、ただ単に母乳を与えるだけで、愛情の対象になるのか、その与え方などは問題にならないのかという疑問は残される。すなわち、赤ん坊に愛情を感じることなく、優しい声もかけずに、嫌々母乳を与えるのと、愛情深く優しい声をかけながら、喜んで母乳を与えるのとは同じかどうか。栄養成分という点では同じであるにしても、そこで母親に対して創られる赤ん坊の認識には、違いがないのかどうか、そこで母親にどのような愛情を持つのかなどである。

「この最初の対象は、後に母親、つまり単に乳を与えるだけでなく、保護し、また他の多くの身体的不快感や快感を起こさせる存在となって完成する。子供の身体を世話することで、母親は子供の最初の誘惑者になる。この二重の関係の中に、最初の、しかも最も強烈な愛の対象として、またその後のすべての——両性の間での——愛情関係の原型として母親が持つ、独自の、他に比すべきものがない、そして、一生涯を通じて変ることのない意義が根ざしている。」
(193～194頁)

母親が赤ん坊の育児を行うことによって、特にそこで快感を相手に与えることによって、「最初の誘惑者」になるという。そこには性的なニュアンスが持たされている。すなわち、身体的世話を受けて快感を得、性的な愛情を注がれることにより、子どもは母親に対して、性的愛情の原型を得て、それは一生涯強く続いていくというのである。

確かに、子どもの早期における母親との関わりは、その後の発育過程に大きな影響を及ぼすのは事実である。それが「愛情の原型」となることも否定できない。しかし「最初の誘惑者」と言われるほどの、積極的に性的に関わってくる存在であるかどうか。もちろん、夫（子どもの父親）に満たされないものを、子どもに向けて接してくる場合、それが性的愛情ととられかねないこともあるだろうが、それが全ての場合に当てはまるわけではない。まして、子どもがあまり好きではなく、それゆえに愛情を注げなかったり、愛情はあるがそれを子どもに注ぐ生活の余裕がなかったりすれば、とても「誘惑者」までにはなれない。

それゆえ、このようなことが言えるのであれば、ある特殊な家庭状況においてである。

「男の子（二歳から三歳の）がリビドー発達において男根期に入り、性器に快感を感じるようになり、これを手で刺激して思いのままに快感を得ることを覚えると、彼は母親の愛人になる。彼は性生活について彼が観察し推察し得た形で、母親を身体的に所有したいと欲し、自分が誇りをもって所有している男性器を母親に示すことによって、母親を誘惑しようとする。」（194頁）

2歳～3歳は、親に対して自己主張をする年齢である。外界に対する関心が広がっていき、それまでの親だけとの関わりから、他の子どもとの関わりも結んでいくようになる。特に3歳児というのは、親の言うことを聞かなくなり、第一反抗期と呼ばれる年齢である。その時期に、自分の性器に強く関心を向け、

母親にそれを見せびらかすというのだから、それまでどのような発達過程を辿ってきたのか、親との関わりだけだったのか、性器にしか関心を向けなかったのか、そこまでに興味・関心が狭くなるには、どのような育て方がなされてきたのか気になるところである。そして、フロイトの時代に、そのような現象が当たり前にあったとするならば、その時代の親や子どもは、どのような社会生活を送っていたのかに関心が向く。確かに現代でも、幼児が性器に触っている現象は目にすることはあっても、そこにそれほどこだわるのは、よほど自分の身体以外に関心を向けられない、偏った社会生活を送っているからだと分かる。大抵の幼児は、自分の関心のある外界（物や人間）に積極的に目を向けていき、自分の身体にそれほど関心を向けることは少ない。性器を「オチンチン」と言って互いに見せ合ったり、わざとその言葉を言って遊ぶことはあっても、それが性器を母親に見せびらかすことにはつながらない。

けれども、フロイトの時代や社会（家族）においては、確かにそう見える現象があったのであろう。家庭という狭い社会の生活で（保育園に通っていたとは思えない）、男児も母親と関わるが多く、他に関心を向ける幅も狭い状況においては、男児が性器を刺激したり、それを母親に見せたりするという現象は、たとえそれが「母親を誘惑する」ものでなくても、見られていた可能性は高い。そして、「本能論」に立つフロイトにとって、それは性的な現象以外に何物でもないことになる。

「母親は、男の子の性的興奮が自分自身に向けられたものであることを非常によく知っている。母親はいつか、それを許しておくのは正しくないと考えるようになる。母親はそうするのが正しいことだと信じて、男の子が手で性器をもてあそぶことを禁止する。この禁止はあまり効果がなく、せいぜいこの自己満足の形に何らかの修正をもたらすにすぎない。やがて母親は最も厳しい手段をとり、男の子がいうことをきかずにもてあそんでいる性器を奪ってしま

うとって脅かす。通常、この威嚇をもっと恐ろしく、本当らしく見せかけるために、母親はその威嚇の実行を父親に委ね、このことを父親にいつけたら、父親は性器を切り取ってしまうだろう、とって脅かすのである。」（194～195頁）

母親は性的な「最初の誘惑者」であったはずなのに、いつの間にか性的に迫ってくる息子を持て余すようになる。息子が性器を弄ぶのみならず、それを母親に向けてくるからである。それを「母親への性的誘惑」と捉えて、母親は、その行為を禁止しなければならないと思う。性器を弄ぶ息子に、それを止めるように言うが、止めることはない（それはそうで、性的に誘ったのは母親の方なのだから）。そこで、性器を切り取ってしまうと脅す。しかも、自分の言うことを聞かないと、父親に言いつけて、性器を切ってもらおうと言う。何とも他人任せの（自己の育児放棄）酷い仕打ちである。子どもの方は、たまらない。

本来なら、性器以外に関心を持てない、その子の社会的な育ちの歪みを問題にし、狭い家庭以外の、もっと広い社会で、他の子どもと遊ばせたり、自分なりの楽しみを見つけさせたりという、社会性の幅を持たせる指導が必要なのに、そのような本人の行為を、ただ止めさせるだけでは、その子の認識の歪みを、より一層増すだけである。他にどう行動していいか、その頭の持っていく先が分からないからである。むしろ、その子が、そうするしかない頭の中を理解して、別の行動に変えてやるのが大事なのである。

ただ、フロイトの育った境遇を見ても、家庭内で母親との親密な関係を結んでいることが多く、これは当時の社会の特性から生じる現象であるとも言える。

「去勢威嚇の影響はさまざまに測り知れない。それは男の子の父および母に対するすべての関係、さらに成人後は、一般に男性と女性に対するすべての関係に現われる。ほとんどの男の子の男性的活動は、この最初の衝撃に対抗し得ない。自分の性器を救う

ために、男の子は多かれ少なかれ、母親を所有する努力を全く放棄する。彼の性生活が永久にこの禁止の重圧の下に置かれることさえしばしばである。」

(195頁)

可哀想の一言である。自分の良かれと思ってしたことが、母から拒絶されるのみならず、身体の一部である大事な性器（泌尿器でもある）を、父に切り取られるというのだから。子どもが冗談めいてそういう行動をとるならまだしも、本気で性器を母親に見せたりするなら（性的なものとは限らない）、大きな衝撃を受けることであろう。親にしても、単なる冗談めかした脅かしならいいが、本気で子どもの性器を切り取る真似をするなら、子どもにとっては恐怖以外の何物でもなくなる。

それでも、その影響が、「男の子の父および母に対するすべての関係、さらに成人後は、一般に男性や女性に対するすべての関係に現われる」「彼の性生活が永久にこの禁止の重圧の元に置かれる」となるのは、本当であろうか。そこまでになるものなのか。

もちろん、そのような親子関係では、幼児の認識はまともには育まれないことになる。親が子どもの頭の中を理解せず、その行為を親の観点から決めつけ、厳しく禁止するというのが、他の日常生活場面にも同様に見られるなら、子どもの認識の育ち方に歪みが生じる可能性もある。そのことが、後に結ぶ人間関係形成に、大きく影響するのもあり得る。性的な関係を結ぶ上においてだけでなく、大人としての人間関係を結ぶ上でも、その影響が出る可能性もある。その結果、神経症という方向に行くこともあり得る。

けれども、人間の精神発達には、親子関係だけでなされるものではない。周囲にいる知人や親戚関係、友人、教師などの影響を受けながら行われていく。親子との関係悪化を補うだけの働きかけを周囲から受けることで、社会生活を円滑に送ることも出来る。子どもの親にしても、周囲からの影響で、その認識が変化していき、子どもとの良好の関係を結べるようになる可能性だってある。それらの可能性を考慮

せず、神経症になっていくと決めつけてしまうフロイトは、やはり性的本能論（決定論）に囚われていると言える。

「男の子の男性的傾向は、いわば父親への反抗的態度の中へと後退してゆくが、その後この態度が彼の人間社会での行動を強迫的に支配するようになる。母親に対する性愛的な固着の名残りは、しばしば母親に対する過度の依存性となってあらわれるが、さらにそれは成人後も女性に対する従属性となって存続する。」（196頁）

去勢威嚇を受けた男児は、親への態度が変わっていく。父親へは反抗的な態度となり、それが後の行動にまで影響する。母親へは過度に依存的な態度になり、それが成人後の女性への従属性につながるという。これらが事実としたら、恐ろしい影響と言わなければならない。性的本能による決定論というのは、ここまで決めつけてしまうものである。

けれども簡単に考えてみて、去勢威嚇で恐怖心を抱いたとして、それで以上のような態度になるとは限らない。怖さの余り父に対して従順（過ぎる）になったり、怒りの余り母に対して反抗的（過ぎる）になったりする可能性だってある。その体験を機に、親との関わりを拒んでいく可能性だってある。それこそが、その子らしく（その親らしく）育っていくことであるが、性的決定論では、それらの可能性は考慮されない。

「いずれにしてもこの体験が生み出す結果は、最も強力な抑圧である。そしてこの抑圧は、無意識的エスの諸法則によって、これらの体験系列の中で活動していたすべての相互葛藤的な感情興奮や反応を、無意識の中に存続させ、思春期以後の自我発達を妨げる条件になる。」（196頁）

ここで強調されているのは「抑圧」である。すなわち、体験した性的外傷体験（去勢威嚇）を意識し

ないように抑えつけることで、本来必要な、性的本能のコントロールが十分なされない成長をしていき、思春期以後の自我の発達が妨げられるという。

けれども、そこではまず親との関係の変化を挙げねばならない。それまでは円満だった親との関係が、去勢威嚇を機に崩れてしまうことである。母親から愛されていると思って、性器を親に見せる行為もした男児が、突然それを禁止され、止めないと父親が出てきて、性器を切り取ると脅かすのだから。母親への関わりが、それまでと異なったものになる。そこで男児がどのような認識になっていくか。ショックを引きずって、父親や母親に対し、まともに関わらなくなってしまうことは、性的本能のみならず、精神発達に大きな影響を及ぼすことはあり得る。その結果、大人として発達していく、思春期以後の自我の発達にも影響する。それは単に、ショックを思い起こさないように努力するためではない。

もちろん、ショックを思い起こさないように努める認識にも問題はある。そのことだけに頭が囚われてしまう弊害である。すなわち、忘れようとしても思い出されてくるのが、外傷的な認識である。意識しないようにすることは、それを意識することでもある。そのことだけに頭が囚われると、他の事にまともな目が向けられなくなる。それゆえ、精神発達に問題が生じることにもなる。けれども、幼児期にそれだけの頭を働かせるものか？

更に言えば、その幼児を取り巻く人間関係にも、目を向ける必要がある。親の代わりに、幼児の頭を育ててくれる人や、親しめる人間関係の存在などである。それらをトータルに見た上で、幼児の精神発達を見るべきである。

「もし精神分析学に、抑圧されたエディプス・コンプレックスの発見以外に何ら誇るべきものがないとしても、この発見だけは、人類にとって価値高い新たな収穫の中に並べ加えることを要求し得るものであると、あえて私は主張しておきたい。」（197頁）

フロイトにとって、このエディプス・コンプレックスの「発見」は、本当に掛け替えのないものだと分かる。精神分析学において、これだけは誇れると言う（逆に言えば、他に誇れるものはあまりない）。それは幼児期において、親と子どもの間に生じる、性的本能の発現をめぐる、葛藤の存在の「発見」である。それは誰にでも生じるとしたのである。

確かに、幼児期における親子の関係に注目したのは、フロイトの功績と言えるもので、それが大人になっていく精神のあり方に大きく影響し、場合によっては神経症などの病になっていくこともあるという見方は、生育過程の大事さを明らかにした。また、異性の親に対する関係の大事さを示唆した点でも注目される。ただ、その展開が性的本能論としてなされ、すなわち身体的な側面からの見方が重視され、脳細胞の働きとしての認識の側面、人間同士の認識が結び合う人間関係の側面、更にはその時代の歴史的な社会のあり方に目を向けられなかったことは、その見方を狭いものにしてしまい、精神分析の様々な分派を作ることにもなった。その点で限界があると言わざるを得ない。その限界を、現代の精神分析が超えられていないのも残念である。

「最初から女の子は男の子がペニスを所有していることを羨んでいる。女の子の性的発達のすべては、このペニス羨望という徴候をもって現われてくるということが出来る。はじめ女の子は男の子とこのことで張り合おうという空しい試みを行なうが、次には自分のこの欠陥を補おうとする努力に成功し、遂には正常な女性的態度に達することができる。」（197頁）

男児に生じるディプス・コンプレックスが、女兒の場合にはどうなるかを述べている。ペニスを持つことを羨ましがり、男児と張り合ったりするが、次第にその欠陥を補うことに目的を変えていき、女性的態度になっていくという。

ここで前提とされているのは、女兒はペニス願望を持つということである。けれども、自分に無いものを求める願望を持つとしても、そう思うようになる生活過程を見ていく必要がある。たとえば、それがあつた方が親に大事にされるとか、家庭や世間で男の方が威張っていて、男子性器のある方が威張れるとかである。それは性器を持つに伴う理由によるもので、単に性器の有る無しではない。まして「欠陥」というものではない。

また、将来的に女性的態度になるということにしても、身近に自らが鏡とする女性が存在し、そのようになろうと思って努力しないと、なれるものでもない。そのようになることで、他人との円滑な人間関係が結べ、自分の社会的位置も見つけるようになる。それは本能によるものではなく、社会関係による一つの精神発達なのである。

「もしまた小さな女の子が男の子になりたいという最初の願望を固執するならば、その極端な場合には、彼女は顕在性の同姓愛着になる場合もあるだろうし、さもなければ成人後の生活において、男性的な職業を選ぶなど、はっきりした男性的傾向を現わすだろうし、他の場合には、愛する母からの離反を結果する。娘はペニス羨望の影響を受けて、母が自分をこんな不満足な形でこの世に生みだした事実に対して母を恕することができない。」（198頁）

ここでは、上記のような経過（ペニス願望を諦める）を辿らない、女兒の場合を述べている。あくまでその願望を固執すれば、将来的に同性愛者になったり、男性的な職業を選んだりし、そのようになれない者は、自分を女性に生んだ母親を恨んで、母親から離反するという。ペニス願望というのは、かくも強力なものだとしている。

ペニスを持つことが、社会的に大きな意味を持っていて、それを持たない劣等感とは決定的なものであり、それをどう克服するかが女性には課せられていて、女性の人生はそれで決まるとされる。正に男性優位

の社会が、そこに見られる。当時の女性は、社会的な職業人としての自立が難しく、親の決めた結婚という将来しかないとするなら、それに飽き足らなく思ったり、それに反発したりする女性が出てもおかしくはない。それはペニス願望というより、自らの社会的な自立願望というものである。そのような願望もまた、社会的な生活の中で、他人との関わりの中で創られていく。どのような生活過程を送ると、そうやっていくのかを見ていく必要がある。

「さて、分析医としての経験から、患者たちの精神構造の中で、何が分析的な影響が一番及びがたいかを問えば、その答えは、女性におけるペニス願望、ペニス喪失を恐れる結果できあがった男性における他の男性に対する女性的態度である、ということになるにちがいない。」（199頁）

治療しにくい精神的なあり方は、女性のペニス願望、男性における他の男性への女性的態度だという。これはともに治療関係が築きにくいものと言える。何故なら、フロイトの治療の基本は、エディプス・コンプレックスの解消であり、母親への依存と父親への恐怖から自由になることにある。そのためには治療者が媒介となって、幼児期の人間関係を再現して、そこで新たな洞察を得ることを目的とする。しかし、上記の人々に、それを求めることは無理である。女性はペニスを得ることに固執して、男性医師にそれを求めたり、あるいは治療に応じることなく、自分独自の求め方をしていくことになる。また男性の女性的な態度にしても、それが治療現場で再現されていき、男性医師への女性的依存となり、幼児期人間関係の洞察が進みにくいことになる。

けれども、それは性的本能論から捉えるからであり、相手の生育過程・生活過程を事実的に検討して、何故に社会生活がうまく送れないのか、何故神経症という現象を呈しているのかを、より幅広く見て検討していけば、それほど治療が難しいとは思えない。

以上、「精神分析学的研究の一つの見本」について見てきた。ここでフロイトが言いたかったのは、神経症におけるエディプス・コンプレックスの重要性であり、それが原因として大きい意味を持つということである。性的本能論の帰結が、ここで説かれてある。破壊本能などの存在にも気が付き、性的本能だけで説けなくなったフロイトの、拠って立つのがエディプス・コンプレックスだというわけである。

引用文献

Freud, J., 小此木敬吾訳：精神分析学概説（フロイト著作集9所収），人文書院，1983

Lecture

What Academic Achievement Did Freud Leave ? —Restoration of Freudian Theory— (6)

Yuji Fuse

【Key words】Neurosis, Oedipus complex, Casruration threat, Repression